

桜蔭俳話会 八月句会 (第二八六回)

メールによる句会

推薦句

稲妻や切り裂かれたるコロナの世 友子

水打つて袋小路のジャズクラブ 才美

今朝の秋から乾けるズボン履く 秀夫

盆休み子らの来ぬ日の茶漬けかな 友子

喪服着て送る入所者夏の昼 眞壽

秋暑し重き字引をもて余し ヤエ子

伏兵のごと現れて稲雀 秀夫

恐々と測る体温今朝の秋 友子

あの島もこの島もけふ終戦日 秀夫

新豆腐どこに違いがあるのかな 眞壽

微睡めば日射しかげりし蟬時雨 和幸

今朝の秋たたみいわしの目の静か 潤子

情熱のほどよき火照り桃を食ふ 才美

ごきぶりの手品のやうに消え失せし 潤子

朝蟬や一人のサラダ拵へる 直子

秋ざくら迷路ゲームの信濃口 いつ子

要推敲句

両頬のしみ深くあり今朝の秋 いつ子

理由 説明している。

添削案 両頬の染みは勲章今朝の秋

正直に影も老ひたり今朝の秋 潤子

添削案 吾影に老ひのありけり今朝の秋

海光や足場解かるる今朝の秋 明美

理由 類型的。

しとやかに俯く百合や真昼かな ヤエ子

理由 類型的。

今朝秋の缺の音を御用邸 才美

理由 類型的。

あれこれと断捨離のこと今朝の秋 直子

理由 類型的。

しがみつく孫抱きしめた今朝の秋 和幸

添削案 しがみつく愛しきものや今朝の秋

川風や仕事帰りの今朝の秋 眞壽

理由 類型的。

秋立つや離島にコロナ置き去りに 明美

理由 類型的。本土に逆襲するかも。

雷鳴に咲く向日葵の逞しく 直子

理由 季語をどちらかに絞ること

コンビニのおにぎりひとつ終戦日 友子

理由

「ひとつ」の句は類型的。

御馬の親子少しお痩せか今朝の秋 いつ子

理由 説明している。

生命の強さ知りけり水すまし 邦子

理由 類型的。

添削案 生命の軽くてつよし水すまし

朴の花月にあづけてより眠る 才美

理由 良い句であるが、少し類型的。

流れ星願いはいつも間に合わず 眞壽

理由 類型的

たいそうな名の朝顔や地味に咲く 潤子

理由 残念ながら、反対語探しに終わっている。

添削案 たいそうな名の朝顔や曲がり角

よべの雨草木生き生き今朝の秋 ヤエ子

理由 説明している。昨夜と今朝から離れ、二

句一章に注意する。

添削案 立秋や草木洗ひしよべの雨

盆踊り座り手を打つ翁かな 秀夫

理由 句の主人公の動詞は出来るだけ一つに

する。

添削案 盆踊り病む手打ちる翁かな

和幸

そわそわと孫をむかえる今朝の秋

和幸

理由 説明している。

添削案 そはそはと孫を待ちる今朝の秋

添削案 夏の果て余りごはんはチャーハンに
ハンガーに星の貨物服飾校

秀夫

理由 「星の貨物服飾校」では少し硬い。

添削案 ハンガーに星の煌めきありにけり

蟬生まる固き地面の穴あまた

ヤエ子

理由 季語を説明している。

添削案 蟬生まる固き地面の途切れけり

翅一枚そろりと動く蟻の道

ヤエ子

理由 蟻が大きな虫の翅を啜えて移動させるのは普通の光景、なんとか詩にしなくては。

秋たつや遊ぶ風の子其処此処に

いつ子

添削案 秋立つやみんな風の子駆け回る

歩の止まる坂の途中の紅芙蓉

潤子

理由 安易なつくり方。坂の途中にある花だけでは、大部分の花と入れ替え出来る。

蜻蛉群れ童離れて缶蹴りす

明美

理由 込み入っている。

添削案 蜻蛉の群れて童は缶を蹴る

風呂上り天瓜粉付けてよちよちと

眞壽

たまさかに想い出す人今朝の秋

邦子

理由 既視感。

添削案 たまさかに人想い出し今朝の秋

夏草や人逝くときも飯を食ふ

才美

理由 既視感がある。

添削案 百日紅人逝くときも飯喰らふ

死後のこと託してきたりさくらんぼ

直子

理由 既視感。

予定なくも地図なぞる旅星祭

友子

添削案 なぞりたる旅の予定や星祭

星流る旅の一夜を徹宵す

邦子

理由 夜と言いながら宵と言っている。

添削案 星流る旅の一夜を語り継ぐ

友二人呼んで西瓜の種飛ばす

直子

添削案 呼べば来る二人西瓜の種飛ばす

立秋の空気燃え立つ岬かな

明美

添削案 立秋の空気の燃ゆる岬かな

静かなる港湾施設星月夜

明美

理由 「静か」は俳句では多用されている。

餌探す白鷺の歩の広きかな

ヤエ子

添削案 餌探しの白鷺の歩の広きかな

エアコンに聞いてはみたが秋はまだ

和幸

添削案 エアコンは黙してゐたり秋はまだ

ゆれかはす梢を渡る今朝の秋

いつ子

添削案 揺れかはす梢眼下に今朝の秋

夏も終わりあまりごはんはチャーハンに